



「いと高きところには栄光、神にあり、
地には平和、御心に適う人にあり。」 ルカ2・14



発行 徳田教会
(広報委員会)
No. 335
練馬区豊玉中1-39-1
TEL (3991) 2101
FAX (3948) 3228

クリスマス号 主な内容

- ・稲川保明神父様御挨拶
- ・大倉一美神父様御挨拶
- ・ヨゼフ会・マリア会報告
- ・連載第9回
- ・「読み直す聖書と生活」
- ・三教会からの報告
- ・サンタクロースと風景―
徒然に思う事



皆様、初めまして、私はバルトロメオ稲川保明神父と申します。この度、菊地大司教様はパウロ大倉一美神父様の引退に伴い、徳田教会のために小教区管理者として同じ宣教協力体(徳田教会、下井草教会、関町教会により形成されている豊多摩南宣教協力体)の一員として活動してきた実績から、私が小教区管理者を担当することが望ましいと判断され、このような仕儀に至りました。どうぞよろしくお願いいたします。

信仰の試練から
信仰のチャレンジへ
小教区管理者 稲川保明神父

さて、まもなく今年も終わりますが、顧みれば2020年は世界中の国々においても、カトリック教会においても、コロナ禍のために、これまで経験したことのない日常生活や信仰生活の活動のすべてが休止せざるを得ない状況を体験しました。そして徳田教会ではこのコロナ禍の中で、さらにもう一つの試練に直面することになりました。11月1日より大倉神父様の引退により、徳田教会の主任司祭が空位となりました。長い徳田教会の歴史においても、初めての経験と思います。幸いなことに大倉神父様は引退なさっても、ベタニア修道女会のチャプレンとして、また慈生会の事業の協力者として同じ構内に在住され、徳田教会の主任司祭という重責からは解放されて、これからはますますお元気に活躍されることと思います。

それでは、主任司祭の空位という状況のために何が変わるのでしょうか？カトリック教会活動で最も大切なミサ、特に主日のミサについては、徳田教会が小教区という公的な教会である限り、東京教区の責任に

において、ミサを挙式する司祭はかならず派遣され、ミサは行われることは保証されています。幸いにも徳田教会のミサのために油谷弘幸神父様（教区本部付協力司祭）、福田正範神父様（目黒教会協力司祭）、稲川圭三神父様（東京カトリック神学院副院長）の3人の司祭が私とともに主日、元日、クリスマスや聖週間、復活祭など大きな祝日のごミサを担当して下さることになり、来年の4月末までのすべての手配が済んでおります。

しかしながら、最も大きな変化は、司祭館に司祭が常駐していないことです。司祭館、信徒会館は教会活動の連絡の要として、事務や財務の対応の拠点として、常に稼働している場所でなければなりません。これまではお二人の神父様がおられましたので、電話対応も訪問者の対応も問題になること、意識することもありませんでした。

そこで、教会委員会の皆様とこの課題、試練をどのように克服するか、ということについて、協議し、司祭館の玄関脇の部屋

を受付用として、教会委員会の経験者を中心に当番制で交代で電話連絡や訪問者、その他の対応をして戴くことになりました。これは大きな負担をおかけすることになりますが、主任司祭の空位の間の徳田教会の活動を補うのは小教区管理者である稲川神父という司祭一人ではできないことであり、つまり空位となった徳田教会を滞りなく「管理・運営」してゆく責務は司祭と信徒の皆さんの協力によつて初めて成り立つということなのです。つまり、「小教区管理」という任務は私という個人ではなく、私と徳田教会の皆さんに任されている任務であると思うのです。

その意味で今回の出来事は「信仰の試練であるとともに新しい信仰へと成長してゆくためのチャレンジである」という積極的な受け止め方が出来るのではないかと思います。確かに司祭の役割は大きいと思いますが、すべての権限やすべてのことに正確な答えや見識をもっているわけではありません。ミサ以外のことでは一人のキリスト者として皆さんと同じく常に考えながら、模索し

ながらキリストの弟子の一人として歩んでいるのです。そこで、もう一度、司祭だけが出来ること、司祭が必ず信徒の皆さんと協議し、その協力を仰いでともに行うべきこと、社会や家庭での生活で中心となつている信徒の皆さんにこそ出来ることということを見つめ直してみたいと思います。

教会という場所ですとどうしても司祭が第一任者のように見えてしまいがちですが、私はいつも思っていることがあります。カトリック教会において本来の主任司祭はイエス様であると。私たちはこの21世紀にあつて、キリストの弟子として、イエス・キリストがなさろうとしていることに気がつき、キリストのように考え、キリストのように行い、キリストのように愛することを目指しています。その意味からもこの徳田教会という信仰共同体の中心におられ、リーダーとしておられるのはやはりイエス様なのだ、と思います。

今年の待降節第一主日(11月29日)から、新しい試みの第一弾として、ミサ中の聖体

授与の奉仕者として信徒の方々にも参加して戴くことになりました。その意図はミサは司祭と信徒の皆様とともに捧げるということを一段と明らかにするという目標のためなのです。教会学校の子どもたち

「ミサは誰が捧げていますか？」と質問すると「神父様です」という答えが返ってくると思います。それは正しい答えですが、さらによい答えは「ミサはそこに復活して世の終わりまでともにいて下さるイエス様とそこに集まつているキリスト者(司祭・修道者・信徒というそれぞれの生き方をしてるキリスト者)たちによつて捧げられている」ということなのです。私たちは洗礼によつて、キリストの祭司職・王職・預言職に預かるものとなつたのです。それゆえ、ミサでは、信徒の皆様も朗読奉仕(預言職)に関わるように聖体授与の奉仕という祭司職にも関わる事が可能なのです。ミサは教会活動・教会生活の源泉であり、頂点でもあります。それゆえミサに司祭と信徒が目に見える形でともにミサを捧げるという姿が現されるのです。そしてミサから始まり、教会活動・教会生活のすべては「司祭中心

ではなく、司祭と修道者・信徒がそれぞれの立場で主体的に関わつてゆく」ということがこれからも大切な心構え・基本方針となることなのです。

今年の半分以上の時間がコロナ禍のために縮こまつて過ごしていたように思います。感染予防策を取りながらも少しづつ前進してゆく時が近づいていると思います。2000年前、主イエスが幼子の姿でこの地上に現れた時代も、貧困や病氣、政情不安など生きることが難しい状況の中に人々に解放をもたらすために「無力な幼子」の姿でイエス様はやつて来られました。私たちもコロナ禍で苦しむ現代社会においては、無力にみえる存在ですが、このイエス様が私たちとともにいることを望まれたからには、ここから何かが始まつてゆくのです。まだ小さな希望、手さぐりの状態が続きますが、このコロナと空位という試練を私たち自身の信仰をより豊かにするためのチャレンジとして受け止めつつ、今年一年のすべてのことに感謝し、また新しき年を祈りのうちに、信頼と感謝のうちに迎えたいと思います。

アツバ、父よ、
私にも去るべき時が

きました。

じよにー・おくら

旧約聖書のコヘレトの「何事にも時があり 天の下の出来事にはすべて定められた時がある」という言葉があります。

そうです、私たち一人ひとりに神さまから定められた時があります。この言葉のように私にも定められた時があり、それがこの2020年11月1日です。この日は諸聖人の祝日にあたっています。そしてこの日は私は徳田教会の主任司祭の務めを終え、主任司祭を引退いたします。振りかえってみる時、17年という長い間、徳田教会の主任司祭として、務めを不十分ながら行なってこられたのは、徳田教会の信者の皆さまはじめ、ベタニア修道女会そして大阪聖ヨゼフ会のシスターの方の沢山のお祈りと助けがあったからです。このことを深く心に収め有り難うございましたと感謝の言葉をこの文書をもって述べさせていただきます。本当

に有り難うございました。

また至らない私の言葉と行いのために心に傷を受けられた方々にお詫びし、許してくださいようお願いいたします。

これからの私は菊地功大司教の命によりベタニア修道女会のチャプレン^{*}及び慈生会の協力者として務めをはたすことになります。近くに住むことになりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。



さて、過ぎし17年を振りかえってみると、世界をはじめ日本でも、大きな出来事が沢山ありました。私が徳田教会の主任として着任したのは2003年でした。

この少し前の2001年9月11日に米国に起きた同時多発テロによって、以後の世界情勢は暴力とテロ、報復軍事行動の

連鎖が起き、日本もそれに巻き込まれていきました。平和憲法によって戦争を放棄した日本が段々と戦争をする国になってきたのです。2001年に小泉内閣が誕生して以来構造改革がはじまりました。郵政の民営化も実現しました。そして私が徳田教会に着任した2003年3月20日に、米英軍がイラクに対して軍事作戦を開始し、日本も12月9日の臨時閣議で、イラク復興支援特措法に基づき自衛隊を同国に派遣する基本計画を閣議決定しました。戦闘状態が続く外国への初の派遣が憲法を無視して始まり今日に至っているのです。その後の安倍政権によって次々に集団自衛権、安保法案、共謀罪など閣議決定され、憲法を改正せずに憲法を意のままに解釈することによって戦争する国になってしまったのです。

徳田教会の献堂50周年が、着任したばかりの2003年9月に行われました。

「徳田教会の献堂50年、宣教75年のあゆみ」をお読みなれば、創立者フロジャク神父によって徳田教会がこの地に創設された意味がよくわかんと思います。復

員してきた父親の自死によって苦難のどん底にあった私たち一家を救ってくださったのはこのフロジャク神父でした。フロジャク神父は大の恩人であり、神父と出会うことがなければ、司祭としての道を歩むこともなく、この徳田教会で2013年7月に司祭叙階50年の金祝を迎えることもなかったことだと思っています。さらに若き日々、徳田教会で助任司祭として働いていた時に身をもって司祭職のありようを示して下さったパリミツシヨンの宣教師たち。ジュニエ神父、若い労働者たちのことを最優先にして働いてくれたルイ神父、子どもが大好きで病人たちの友だったシュバリエ神父たちに感謝しています。

JOC、ACCO運動に参加して共に労働者たちと歩むことができたのも、徳田教会で諸先輩の司祭たちと同僚司祭たちとの深い交わりがあったからです。

徳田教会に来てからもずっと続いて元「従軍慰安婦」のハルモニ、ロウたちに對して戦後補償問題のために支援することができたのも市民運動の方々と働くこ

とができたからです。日本の海外進出企業問題、中でも韓国スミダ労組支援に力を尽くすことができたのも町田教会、清瀬教会、そして徳田教会の信者たちの支援があったからです。白柳誠一枢機卿の命によって東京教区に正義と平和委員会（正平委）を発足させ今日に至っていることも「いのちをたいせつにすること」を常に心がけている正平委のメンバーたちの働きで感謝、感謝です。この正平委の活動で、無実の死刑囚袴田巖さんの再審請求、自衛隊の海外派兵反対、脱原発運動、改憲阻止運動などをキリスト者だけでなく仏教信徒、僧侶の方々と、平和を実現するキリスト者ネット、宗教者平和ネットとして17年にわたって運動してこられたのも信者の皆さまの多大な援助があったからです。

昨年11月、フランシスコ教皇が「すべてのいのちを守るため」をテーマに来日され、神が与えて下さったいのちを守ることが私たちの使命であることを長崎、広島、東京を訪れて語ってくださいました。「核を持つことは犯罪です。」「死

刑制度は廃止すべきです。」などの短い言葉がその重要な意味をさしています。日本各地で語られた教皇の言葉を心にとめましょう。10月30日、核兵器の開発から使用まで一切を全面禁止する核兵器禁止条約（核禁条約）の批准数が50力国・地域に達し、来年1月22日に発効することが決まりました。しかし、この画期的な条約に核保有国と「核の傘」の下にある同盟国は参加していません。残念極まりないのは唯一の被爆国である日本の政府も参加していないことです。

今年の1月、中国武漢市で発生した新型コロナウイルスの感染が今や世界中に蔓延して収束の兆しさ見えません。日本でも感染者の数が増えるばかりです。教会も感染を避けるために3密を避け、感染しない、感染させないために主日のミサ参加を制限することを今でも続けています。このような状況で今年の主の降誕祭を信者の皆さんと共に祝いすることができるか未知のままです。

しかし、このような時にこそ私たちの信仰のあり方が問われるのではないかと

思います。「恐れるな、私は世の終わりで共にいる」との主の言葉を信じコロナがもたらす悪と闘いましょう。

三年前から、私は緑内障を患い、耳も遠くなってきました。定められた時がきたのです。新しい主任司祭が任命されるまで、カトリック関町教会の主任司祭である稲川保明神父さまが徳田教会の教会管理者として任命されました。稲川神父さまの指導に従って教会生活を今まで同様に続けてくださるようお願いいたします。

最後に感謝の言葉を述べたいと思います。この7年間私のために色々助けてくださり、健康管理のため叱咤激励し、毎日の食事を整えて下さった猪熊太郎神父さま本当にご苦労さま、有り難うございました。

17年にわたって、拙い文章をもって、徳田教会の広報誌「櫛」の巻頭言を書いたことを謝してみたいと思います。編集者の皆さん17年間ご苦労様でした。

*チャプレン
教会・寺院に属さず施設や組織で働く聖職者（神父、司祭、牧師、僧侶など）

ヨゼフ会報告

松本 大

2020年は、新型コロナウイルス感染症拡大の様相なことが制限された年となりました。公開ミサの中止、人数と年齢を制限した上でのミサの再開を経て、9月27日から年齢制限が解除されました。また、11月8日からは信徒ホールにスクリーンを設置し、聖堂のミサをライブ中継するという新しい試みが始まりました。このような状況のなか教会行事は軒並み中止になり、ヨゼフ会主催の夏の恒例行事、お楽しみ会も中止になりました。また、11月に予定していた全生園スタディツアーも無期限延期になりました。まだまだコロナウィルスの勢いが止まる気配はありませんが、来年は教会活動も徐々に再開できるようにすることを祈るばかりです。

マリア会報告

青山 日出子

昨年の降誕祭祝賀会以降、マリア会の活動はほぼ休止になりました。コロナ禍により、祝賀会や大掃除、バザー時の食事提供が禁止になったのです。この状況下では人が集まること自体危険ですから役員会すら秋になつてからの二回のみでした。

当初、自粛、自宅待機に努めましたが秋にはミサが再開され、安全に配慮しつつ厨房の掃除を始めました。ミサ後、密を避けるため数人で四回ほど作業し、大分きれいになりました。従来は行事への対応で手が回らなかつた仕事ができただことは今年の成果と考えます。

総会も中止になりました。例年の活動報告に加え、新任、退任役員の挨拶文を載せた資料を配布し総会の代替といたしました。

来年度も会員皆様のご協力のもと活動してまいります。宜しくお願いいたします。

連載「読み直す聖書と生活」

(9)「与える幸いにあずかる」

徳田教会信徒 田畑 邦治

何も持たなくても

クリスマスの典礼の中に「ひとりの男の子が私たちに与えられた」という言葉があります。キリスト者にとつては、この言葉は、父なる神さまが御子イエスを人類に与えられた、ということと自然に理解されています。しかし、このことがいったい何を意味するかは汲み尽くしがたい神秘です。

最近、わたしはなぜか「与える」という言葉に縁があるというか、この言葉に関心を抱いているのですが、すると、ありがたいことにそれを考えるヒントもまた日々の生活や読書などから与えられているのです。

本誌『櫻』の前号(334号、9月27日発行)に、長いこと教会学校のリーダーをして下さっている井上大嗣さんの記事「生存確認のお知らせ」(9頁)があり、私はとて

も深い印象を受けました。

記事は教会学校でコロナ禍の前にフロジヤック神父様について学んだこと、に触れたあとで、次のように展開します。以下長くなりませんが大切なので引用致します。(傍点筆者)

私は、幼少期を過ごした長崎で、コルベ神父様の生き方から、「も・し・も、あ・な・た・が・何・も・持・つ・て・い・な・く・て・も、あ・な・た・に・は・与・え・る・も・の・が・あ・る。」という事を学びましたが、フロジヤック神父様の生き方から同様の事を感じました。医者でも資産家でもないフロジヤック神父様が、結核患者のために最初に始めたことは、彼ら一人一人をお見舞いする事だったからです。事業はその後、大きく発展しましたが、その源泉は、神様から来る

純粋な愛であつたと思います。

何も成長せず、言い訳がうまくなるばかりの至らない私ですが、イエス・キリストと出会ったからには、偉大な先人たちに倣い、いつ、どこでも神様から頂いた愛を周りに与える人間でありたいものです。

井上さんの慎ましい文章には、キリスト教信仰・キリスト教霊性のかなめともいうべきものがみごとに表現されていないでしょうか。コルベ神父、フロジヤック神父、そしてさかのぼれば、「偉大な先人たちは、自分からは何も持たないままに、ただイエスをとおして与えられた神の愛、という宝をもつて人々を愛し、自らを与えたのでした。そうであるならば、私たちも貧しい、欠点の多い、成長もままならない人間の力にあずかって、その「愛を周りに与える人間」になりたい、と。

与える幸い

さて、聖霊降臨後の教会のエピソードにこんなことがありました。施しを願った生来足のきかない男に対して、使徒ペトロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを与えよう。ナザレのイエス・キリストの名によつて、歩きなさい」と言い、右手を取つて立たせたのでした。あとでペトロが人々に言うように、これは「私たちの力と信仰深さ」によるものではなく、「イエスの御名」がなしたことでした。(使徒3・1-16 参照)

このようなイエスの名に連なるキリスト者のありかたを、使徒パウロは次のように力強く宣言しています。

悲しんでいるようでも、常に喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持つています。(Ⅱコリント6・10)

ある」と教えられたように、「神様から来る純粋な愛」という「源泉」に立ち戻って一歩踏み出すことが必要ではないかと思ひます。

ここにいうような意味での「与える」とについて、福音書には記されておらず、不思議な事に使徒言行録に書きとどめられたイエスの言葉があります。

私(パウロ)は人の金銀や衣服をむさぼつたことはありません。あなたがた自身知っているように、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも働いて来しました。このように、労苦して弱い者を助けなければならぬこと、また、主イエス自身が、『受けるよりも与える方が幸いである』と言われたことばをこころに留めておくように、私は万事につけて、あなたがたに示してきたのです。(使徒20・33-35)

これはパウロが小アジアからエルサレム

に向かう前にミレトスにエフェソの教会の長老たちを集めて行つた「訣別の辞」の最後の部分で、雰囲気はあたかも遺言のようです。ここでパウロは、噛んで含めるような訓辞を与えているのですが、その中に語られたイエスの短い言葉は注目すべきではないでしょうか。「受けるよりも与える方が幸いである」。この短い、単純明快な言葉で、イエスは、ご自分のありかたを端的に教え、同時に、父なる神が与える方そのものであることを語り、あわせて、そのありかたにあずかる人間のほんとうの幸いについて教えたのだと思います。

ここにある「幸い」は、私たちが本能や常識でいう、自分の欲求の充足や、ギブアンドテイクの互酬的な幸福ではなく、本来神にあつて、それが恵みによつて人間にも可能になるような没我的な相手中心の幸いです。パウロの弟子であるルカ福音史家はそのことを次のような極端なたとえ話を通して伝えています。

またイエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。昼食や夕食のふ

るまいをするなら、友人、兄弟、親戚、近所の金持ちなどを呼んではいけない。今度は彼らがあなたを招いて、お返しをすることになるからである。祝宴を催すばあいには、むしろ、貧しい人、障害のある人、足の萎えた人、目の見えない人たちを招きなさい。その人たちはお返しができないので、あなたは幸いである。(ルカ14・12・14)

われわれの常識を逆なでするような話です。しかし、これは神の国の祝宴に人が無償で招かれるたとえ話の文脈の中で語られていることから、ここにいわれる「幸い」とは、本来神にのみあるような、人間の功績や身分に依存しない、無条件に与えつくすあり方としての神の幸いを意味していると思われまます。

すべては収入と支出のバランスシート(損益対照表)に従って動くのが現実である、という考えが支配的な世界に生きている私たちにとって、福音にある無条件の譲与などというものは人間の幻想にすぎないのでしょうか。しかし、「現実」とは何をいう

のでしょうか。

聖書に証言されている神の無条件の与え(譲与)が知られていないところで、どれだけ多くの人々が冷酷な差別や貧困に苦しんでいることでしょうか。それこそが現実ではないでしょうか。

私たちに与えられるクリスマスの恵みを、ヨハネ福音書は、「神は独り子を与えるほど、世を愛された。」(3・16)と端的に表現しました。「世」である私たちはこの「源泉」に立ち返って、自らも与える生き方の幸いにあずかりたいと思います。



お知らせ

一、主日ミサ時間の変更

(11月8日から実施)

9時30分・11時30分

・人数制限あり

・週日ミサは非公開

二、ミサ中の聖体授与は、

聖体奉仕者も行う

(11月29日から実施)

*詳細は10月の委員会議事録と稲川保明神父の11月15日付文書に記載されています。



豊多摩南宣教協力体

協力体つうしん

—三教会からの報告—

カトリック関町教会

関町教会の2020年

小川 久美子

二〇二〇年一月二六日の信徒総会で新しい教会委員会が発足し、本年度の活動が始まった矢先の二月二六日(灰の水曜日)のミサを最後に、教会は休眠状態となり、ミサの非公開という誰も経験したことのない事態に戸惑いながら、全信徒への通知を出すことから作業を始めました。

四旬節、ご復活のミサも非公開となりましたが、洗礼式だけは大司教様の許可を頂いて四名の方が受洗のお恵みに与ることができました。

この辛い期間を経て六月二二日、漸くミサの公開が始まりました。関町教会で



古市匡史神学生の講演会 (9月27日)。限定配信も行われた。

はコロナ感染予防として以下のような対策を現在も続けています。

* 年齢制限 当所は七九歳までの関町教会所属信徒。現在は年齢制限はなし。居住地を四つに分け、二地区ずつ隔週ミサにあずかる。

* 聖堂に入る前に検温、手指の消毒、席札を渡し、指定の席に座る。席札に名前と連絡先を記入し、もしコロナ感染者が発生した場合、発生源の周りにいた人に連絡する。

* 聖堂内の座席数は通常の四分の一程度。換気の為、窓、入口は開放。

* 聖体拝領の際は中央に間隔を空けて並び、手指の消毒を受けてから拝領。

* 献金袋、「聖書と典札」、お知らせその他の印刷物はすべて席に置いてあり信徒はすべて持ち帰る。献金と席札はミサ後回収。

各部会の活動もできる範囲で行いました。

* 教会学校はズーム会議とリモートこどもミサを実施。ミサでは、聖堂と各家庭を結んで、こどもたちが自分で描いた絵を奉納し、共同祈願を唱えました。

教会で直接参加したこどもとリモートで参加した八家族の笑顔が見られ、直接会えなくても教会を通じて心が通い合っていることが実感できました。

* 毎年高齢者の集いとして行われている慶老会は中止となりましたが、いつも参加されている七〇名程の方には「五大陸のロザリオ」を贈呈しました。

また毎月集会を催されている老婦人の

集まりである「ロザリオ会」の方々には「自粛期間の様子」をアンケートで伺い、一冊の冊子にまとめました。

＊例年秋の文化祭「テレジア祭」も講演会とチエレスト楽団の演奏会はりモーター配信で行いました。どちらも教会でも、各ご家庭でも見られるという選択肢があり、新しい試みをするのでできました。更に作品展も日頃の成果を発表される場として定着しており、絵画、書、その他の力作が聖堂とホールに並びました。

前代未聞のこの状況にどう対処したら良いか、本当に見当が付きませんでした。が、主の見守りのもと、神父様の力強いご指導、IT関係、医療関係に詳しい信徒の方々、そして目に見えないところでの惜しみない多くの方の協力を得て、今日まで無事に過ごして来られたことに感謝しています。

コロナに明け、コロナに暮れる一年でした。

カトリック下井草教会 2020年この一年

吉永 真治



1. 主任・助任神父交代

今年の復活祭（残念ながらミサはありませんでしたが）から、主任神父の西本裕二神父は、長崎の出津に赴任となり、新主任神父として三河島教会の主任神父をしていた並木豊勝神父に代わりました。助任神父であったマルシリオ神父は、調布教会の中のチマツチ資料館館長として異動しました。

新主任の並木神父は、下井草教会出身

の神父であり、30数年前までは、当時、下井草教会の隣にあった育英高専で教鞭を執りながら、下井草教会青年会の指導をしていました。私も、当時、指導を受けていた一人です。

2. 聖堂外壁補修工事

下井草教会の聖堂は、献堂64年になり、外壁のひび割れや、モルタルの浮きが出てきたため、今年、大規模な外壁補修を実施しました。それに伴い、外壁も全面的に塗り替えました。前よりほんの少しクリームがかった色に変えましたのでお近くにお寄りの際は、ぜひ、きれいになった教会を見に来てください。

3. コロナ禍対応

今年2月下旬から始まったコロナ禍対応に皆様の教会も大変だと思えます。

3月1日から、主日のミサも中止され、新主任司祭のあいさつもできない状態であったため、並木神父が赴任されてきてから、6月21日のミサ再開までの間、神父様の顔を覚えていただくとともに、教会とつながっているという気持ちを持つことが出来るように、毎週YouTubeで神

父様による説教を流しました。

6月21日から主日のミサを再開しましたが、3週間ほど前から、どのような形態でミサを行うことが出来るのかを神父様、教会委員で検討し、ミサの回数を増やし、一度に参加できる信者の人数を80人に制限し、受付で体温を測り参列してもらうことにしましたが、ただ、申し訳なかったのは、75歳以上の方は、自宅でお祈りをお願いすることになったことでした。そのため、教会は皆さんと共にいることを知ってもらう方法として、月に1回でしたが、ミサに参加できない方々に教会通信「ぶどうの樹」を郵送していました。

9月6日からは、主日のミサに参加できる年齢制限を解除しましたが、人数制限、受付により体温測定は、そのまま継続しています。

問題は、クリスマスです。今年は、24日のミサを2回増やし、24日、25日のミサは、事前申込制として、座席も指定することになりました。この原稿を書いている今は、申込を受け付けている最中ですが、混乱なくみんなが、クリスマスのミサに授

かることが出来るように祈っています。

コロナ禍の状況がいつまで続くのかわからない状況で、これが、私たちに課せられた意味は、何だろうか(信仰の薄い私には、多分解らないと思いますが)と、考えながら注意して生活しています。

教会共同体とは何か、 を考えた6か月

徳田教会 三上 一雄



韓国の教会のウィルス報道があつた直後、東京教区では菊地大司教様がいのちを優先させるとして、2月27日灰の水曜日翌日からのミサの非公開が宣言され、その後政府の「緊急事態宣言」が発令さ

れました。事情を良く呑み込めないまま、自宅に留まることを求められ、四旬節も、復活祭も、聖霊降臨もありませんでした。《クリスチャンであるよりも自分自身の命の危険を感じて》

はじめは全世界規模でのウィルス感染になんで今という戸惑いと、パンデミックという状況に恐れ、怯えしかありませんでした。高齢者の死亡率が高いと言われ、祈りは生き永らえさせてほしいという自分中心の祈りしかできませんでした。その後、新型コロナウイルスは、地球規模での開発の問題などの人間のおごりの結果でもあることがわかり、フランシスコ教皇の回勅「ラウダート・シ」の再読の意欲もわいてきました。

《ミサ再開の年齢制限》

6月からミサが制限付きながら再開することになりましたが、厄介な問題は年齢によって参加者を制限するということでした。徳田教会では64歳以下での再開となりましたが信徒構成の実態からいえば半分以下の人がミサに与れないので神父様方と調整しましたが適わず64歳

以下で行われました。

《共同体のつながりを考え始める》

6月時点では、ミサの年齢制限問題が中心で教会委員会はミサに与れない人のこと、つまり共同体全体のことを考えることが出来ませんでした。コロナ感染は短期終息すると楽観的に考えていましたし、長く続いてはこれまでの営みが崩壊するから早く終息してほしいという、私たちの身勝手な願望がそうさせたと思います。

《すべてのいのちを大切に、へ》

8月の聖母被昇天を迎える頃に、ようやく教会共同体全体のことまで考えられるようになりました。フランシスコ教皇が共通の故郷地球やすべてのいのちを大切にと訴えていたことに遅まきながら考える余裕が生まれました。

教会の中だけのつながりから、周りの人たちとも一緒に生きていく、そんな当たり前のことを考えたいと思い始めています。

この地球のみんなが普通に暮らせるように生き続けられる日々の到来を強く待ちます。

ち望み、行動したいと考えるようになれました。

《大倉神父様の引退》

ようやくキリスト者としての生き方に気づき始めて、みんなで考え始めようとした時期に大倉神父様の引退が発表されました。救いは小教区管理者に宣教協力体でお世話になっていた稲川神父様が任命されたことです。

当面は新任の主任司祭が任命される（間違いない?!）まで、信徒たちが協力してキリスト者らしい（人間らしい）共同体にしていく努力が否応なく求められています。

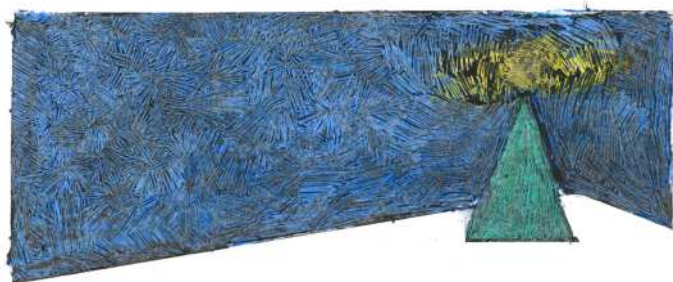
《これまでにないクリスマス》

コロナは終息の気配を見せないばかりか乾燥する季節になって再び三度勢いを増す気配が感じられます。そして、17年間、信徒とともに歩んでくださった大倉神父様の不在。

徳田教会の私たちはこれまで経験したことのないクリスマスを迎えます。人間のつながりとは何か、司祭と信徒の関係は、信仰共同体とは何か、などなど一人一人

が考えるクリスマスになります。

考え、話し合えばきっと光が見てくると信じています。



「サンタクロースと風景― 徒然に思うこと」

山本 新治

待降節を無事に終え、ご降誕を迎える時に、いつも思い起こすことがあります。

5、6年前のことです。12月のある寒い日に、家内と二人で近くのお蕎麦屋さんでおそばを食べていたときのことです。小学5、6年生の男の子だったと思います。店の中と外を何度も出たり入ったりしているのです。どうしたのだろうといぶかしく思ったのです。どうやらお店のお子さんらしく、調理場のお母さんが「まだ来ないわよー」って言うのですが、2、3度繰り返し返していたら会計のおばあちゃんがお孫さんを見て、「今朝から落ち着かないんですよ、サンタさんがまだ来ないって!」。思わず店にいた数人のお客さんが吹き出しそうになり、クスクス笑いはじめました。それでも本人ははじめに真剣な顔つきでいたのですが、なにやらお客さんに笑われてい

ることが分かり、気恥ずかしそうになつて家の中に引つ込んでしまいました。日ごろ忘れかけていた貴重な経験をさせてもらいました。

アメリカの8歳の少女バージニアちゃんが、手紙で「サンタクロースって本当にいるの?そんなのいないって友だちは言いました。お願いだから本当のことをおしえてください」とニューヨークの新聞社の編集部に問い合わせの手紙を書きました。返事は社説になつて掲載され、「バージニアさんへ、あなたのお友だちは間違っていますよ。探偵さんに見張ってもらつてはどうでしょう。サンタさんは煙突から降りてこないからついていないという証拠にはなりません。愛や思いやりは見ることはできませんか?見えないからと言って、それが無い世界を想像できますか?」。サンテグジュペリの「星の王子さま」の中にも、きつねが王子さまに教える言葉があります。「こころでみなくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」というセリフです。アメリカ

で見たテレビ番組。クリスマス商戦が本格化している時にテレビ番組で歌っている有名な歌手が言った言葉を思い出します。「人々はこの季節になるとことさらに周りの人々に優しくなります。しかしこの季節だけではなく、いつでもその優しさが人々の心にあつて、いつまでも与え続けてほしいものです。」

聖書に出てくる「東方の三賢者」。それぞれ「黄金(は現世の王を指します)、乳香(は神)、没薬(は救世主)」を捧げものとして「幼きイエス」に捧げました。世界で最初のクリスマスプレゼントだったのではないかと思います。お互いのためにクリスマスの贈り物を買った「賢者の贈り物」の小説は有名です。英語の教科書にも紹介されています。これを書いたオーヘンリーは「二人こそ賢者」と言います。貧しい夫婦は互いの宝物(夫は代々伝わる金時計を売って櫛を、妻は美しい髪を売って金時計に合う鎖を)を台無しにしてまでも互いに贈り物をします。

さて、話は変わります。今年も聖堂の外の3本のイチヨウの木とマリア館の横のみの木の剪定をしてもらいました。なんのためらいもなくしてもらったのですが、あとで剪定された木々を見て実に殺風景な教会の様子に驚きました。さっぱりしたねと言う人もいれば、なんか寂しいねえ、と悲喜こもごもでした。夕方用事があつて司祭館に来て鍵を開け、主のいない司祭館の中を見て、その寂しさに呆然としました。

「あるべきところがない」ことの実感が今年ほど感じたことはないです。大切なものを失ったことへの失望感です。しかし考えてみれば、人生すべてこの繰り返しなのだと思います。その象徴が「復活」です。生まれてくることの喜びは何物にも替えられません。「死者の中から復活」は力強いエネルギーと大きな喜びを与えてくれます。「降誕」もまた「生への感謝と喜び」です。

サンタさん、目に見えないもの、人々への優しさ、賢者の贈り物。そして東方



の3博士たちの幼子を求めて遠い旅路を終えついに見つけた大いなる喜び。これらのすべては人との交わりの中にあつて始めて見い出される「喜び」です。徳田という共同体の中にあつて、「人との関わりを大切に」しながら、希望を持つて一歩ずつ新たに歩み続けていかなければならないのだと思います。まさに、「神に感謝」です。

大倉神父さんへの「ありがとう」

岩井 奈織美

「ばあさんは元気か？」と、母のこと、いつも気にしてくれてありがとう。その問いに励まされていました。これが、神父さんに「ありがとう」って言いたいことがたくさんある中の一番目、二番目は、聖体安置式で、ご聖体を運ばれる姿にです。

大事に、本当に大事に、そして丁寧にゆつくりとご聖体を仮安置所へ運ばれる姿、神父さんと心から向き合うこと、神父さまを愛することを無言で示してくれて、ありがとう。母が以前話してくれた、「わたしの一番大切なことだから、わたしの子どもたちに洗礼を授けていただいた。」との言葉が、心に、身体にしみ込みました。言われたときは、「？」でしたが。

神父さまに委ね、「弱いときにこそ強く」いられます。イエスさまの家族であることがわかります。ありがとう。



9月27日、聖ヴィンセンシオ祭のミサ時に
初聖体式がありました。
ヨハネ・パウロ二世 鷲野実さん

初聖体おめでとぅげいます



11月15日、油谷弘幸神父様のもとに七五
三の祝福式がありました。健やかな成長
をお祈りしましょう。

波多野 絵真さん 3歳
松本 尚己さん 5歳
松本 奈佳さん 7歳



・11月7日 府中墓参

稲川神父様

・11月1日 諸聖人祝日ミサ

大倉神父様

猪熊神父様





ガリラヤ湖畔

当日のガリラヤ湖は
波たけることもなく、
遊覧に恵まれた
穏やかな湖でした

聖地イスラエル巡礼②

2019年12月3日～10日(8日間)

心に残った聖地の一部を紹介させていただきます。

広報写真班 森 義夫

♪ ガリラヤの風がおる丘で 人びとに話された
恵みの御言葉を わたしにも聞かせてください ♪



♪ 嵐の日波たける湖で
弟子たちに諭された
力の御言葉を
わたしにも聞かせてください ♪

聖ペトロ召命教会

イエスが、漁師のペテロと
アンデレの兄弟を
召命した所に建っている。
マタ4:18-20



教会内の祭壇前には大きな岩があり、
ここで復活したイエスが弟子たちに、
パンと魚を与えたとされています。
ヨハ21-13



昼食は、イエスも食べたでしょう『ピーターフィッシュ』
ペトロの魚とも呼ばれており、白身で淡泊(^^)/ 美味。
湖畔には至る所に魚のモニュメントがありました♡

山上の垂訓教会 ガリラヤ湖の湖面から125mの高さの丘に建てられた、八角形のドームの教会です
山上の垂訓(説教)として有名(マタ5:1-12、ルカ6:12-16)



過去に2人の教皇が訪れ
ミサをあげた祭壇です



祭壇の天井には8つの祝福が
ラテン語で書かれています

9月 教会委員会報告

- △ボーイスカウト
- 今後の活動予定▽
- ・総会はコロナ禍で書面開催
- ・9月27日(日) ボーイ隊の隊集会を予定
- △活動の見直し▽
- ・草刈り(報告) アルバイト2名に依頼した
- △協議事項▽
- ・ミサの年齢制限解除への対応
- ・9月27日(日) 初聖体1名
- ・11月7日(土) 共同墓参
- ・11月8日(日) 合同追悼ミサ
- △各会報告▽
- ・マリア会 コロナ禍で総会は中止
- ・広報 櫛「ヴィンセンシオ祭号」を発行
- ・訪問会 7月、9月に世話人会開催
- ・財務 特別献金が増えている
- △その他▽
- ・教会施設の清掃・草取りについて

10月 教会委員会報告

- △ボーイスカウト
- 今後の活動予定▽
- ・育成会長は来年3月までは大倉師が継続
- △活動報告▽
- ・9月27日 初聖体
- △協議事項▽
- ・大倉師の引退に伴う引継ぎについて
- ・教会施設の管理について
- ・今後の教会運営について
- ・司祭が常駐しないので「受付」が必要
- ・11月8日(日) からの典礼について
- △各会報告▽
- ・訪問会 指導司祭は4月まで大倉師
- ・教会学校 少しずつ活動を再開したい
- ・マリア会 総会を取りやめ
- 役員選出は書面にて
- ・ベタニア修道女会 10月16日(金) 誓願式
- ・典礼委員会 11月16日開催

11月 教会委員会報告

- ・広報 クリスマス号
- 大倉師と稲川師に原稿依頼
- △その他▽
- ・教会施設の掃除について
- ・草刈りについて
- ・今後の葬儀について
- △ボーイスカウト
- 今後の活動予定▽
- ・11月8日(日) 入団式
- △活動報告▽
- ・共同墓参、合同追悼ミサについて
- △協議事項▽
- ・大倉師の引退に伴う引継ぎ
- ・今後の教会運営について
- ・総会について
- ・11月8日からの典礼について
- ・クリスマスの準備
- ゆるしの秘跡、大掃除について
- △各会報告▽
- ・マリア会 11月15日役員会

・ヨゼフ会 総会開催を検討中
・広報 櫟「クリスマス号」
編集作業中

・典礼委員会 ミサ配信、
聖体奉仕者について話し合う

・一粒会 本部送金残り分は10万円
訪問会 12月5日(土) 全大会

△その他▽

・草刈り、司祭館の清掃、
馬小屋作りについて

典礼と行事

12月24日(木)「主の降誕前夜」

ミサ 19時 21時

25日(金)「主の降誕」

ミサ 9時半 11時半

ベタニアホーム ミサ 14時

27日(日)「聖家族」前夜

ミサ 9時半 11時半

1月1日(金)「神の母聖マリア」

ミサ 11時半

3日(日)「主の公現」

10日(日)「主の洗礼」

17日(日)教会委員会
31日(日)信徒総会

帰天

永遠の安息をお祈りいたします

ペトロ

三上 祐三 様 8月27日

コンラド

原澤 新助 様 9月6日

ヨセフ

葛原 弘美 様 10月9日

マリア・ゴレッティ

幅田 美知江 様 10月29日

編集後記

昨年の「櫟クリスマス号」には「徳田まつり」や「教皇様の日本訪問」など明るい記事が多くみられます。ところが、今年に入った途端、私達は今までに経験した事の無い事態にみまわれるのです。それが新型コロナウイルスの感染拡大です。あつという間に世界中が飲み込まれ

私達の教会でも長い期間に及ぶ「ミサの中止」という事態に見舞われ、すべての信者がミサに与れる様になった現在、大倉神父様の主任司祭引退により司祭不在という初めての経験をしています。その様な時に稲川保明神父様を教会管理者としてお迎えし、油谷弘幸神父様、福田正範神父様、稲川圭三神父様が稲川保明神父様と共にごミサを挙式して下さることになりました。いまだに続くコロナウイルス感染拡大の中で、徳田教会は多くの方々に支えられながら変わりはじめています。そして「徳田教会の広報」として私達広報委員も胸を張って活動を続けていきたいと思っています。

お忙しい中、原稿をお寄せ下さった稲川保明神父様、大倉一美神父様、田畑邦治様、山本新治様、他原稿を寄せて下さった多くの方々に心から感謝し、御礼を申し上げます。有難うございました。

今回の「櫟」の表紙を飾るのは、徳田教会の(今年の)光輝く「馬小屋」です。今年も素敵なクリスマスを迎えることが出来ました。神に感謝!

Y.K



大倉神父様 ありがとうございました

写真：2014—2020

